



名古屋大学野依記念館にてR・ホフマン氏と(2009年3月)

しょっちゅう警官に呼び止められ、持ち物検査をされるのである。しかもこの警官たちはどう見ても、普段町にいる「おまわりさん」ではない。こうした行為に腹を立て、アラブ人の友人のために、警官と口論をしたスペイン人学生もいた。日本人でも小柄な私などは、すごい武器を持った警官を見ただけで怖くてたまらなかった。だからこの学生の勇気には感動したものである。「国際協調」や「民族の共存」という言葉は美しいが、現実はそのなかに生易しいものではない。ともに机を並べている友人たちが、母国の思惑で一瞬にして敵味方になる。

その中でいかにして妥協点を見つけてゆくのか、というのは大変面倒な作業である。しかしそれを怠ると、どうしようもない事態になる。私は日本館とスペイン館という寮に一年ずつ住んで委員を務めたのだが、特にヨーロッパと中東・北アフリカ等のイスラム圏諸国(つまり小さい国が隣接している地域)の学生たちの、「交渉」を継続する粘り強い姿勢から多くのことを学んだ。そしてこの経験は国際的な研究活動を進める上でも大変役に立った。

### フランス革命を通して 世界と出会う経験

私がパリに着いた年はフランス革命二〇〇年記念で、フランス人の指導教員は革命と関係するテーマを薦めてくれた。結果としてこれは私と世界をつなぐ大切なテーマになった。このときから開始したラヴワジエ夫人(一七五八—一八三六、近代化学の父であるラヴワジエの妻にして研究協力者)研究は、後に国際的に注目されたのである。私はドイツにおける化学年である二〇〇三年に、ミュンヘンで行われたラヴワジエ関連の国際シンポジウムに招待されたただ一人の日本人である。留学中に友人となったイタリア人研究者が私を指名したの

である。二〇〇七年にアメリカで出版された『新科学者伝記辞典』では、フランス人ではなく、日本人の私が「ラヴワジエ夫人」の項目を執筆した。現在編集が進行中のフランス・ベルギー共同制作事業、「啓蒙時代の女性辞典」でも項目「ラヴワジエ夫人」の担当者は私である。この両方の仕事に私を推薦してくれたのは、この研究が機縁で親しくなったフランス人研究者である。

そしてこのテーマは思いがけない出会いも用意してくれた。なんとラヴワジエ夫人が登場する戯曲を書いた、一九八一年度のノーベル化学賞受賞者にして詩人のロアルド・ホフマン氏と知己になったのである。氏はポーランド生まれのユダヤ人で、ホロコーストを生き延びて米国に移住した人である。氏のおだやかな笑顔の裏に、自分がヨーロッパで垣間見た、多様な宗教と民族が混在する世界の魅力と怖さの両面を感じた。「ラヴワジエ夫人」という、フランス革命を生きた一人の女性を通じて、私は時間と空間を超えた「国際」交流を経験している。これも自由な石坂奨学生としての、パリの日々あったのことと思っている。今後も、あの貴重な体験を忘れることなく、私なりの国際親善に努めていきたいと思っている。

# 変動するヨーロッパに生きて

## ―フランス革命二〇〇年のパリ

一九八九年国際文化教育交流財団奨学生としてフランス国立社会科学学院留学。一九九二年東京大学大学院理学系研究科科学史科学基礎論博士課程単位取得退学。一九九四年より名古屋工業大学にて教鞭をとる。

名古屋工業大学大学院

工学研究科准教授

川島慶子

かわしま けいこ

### ▼石坂の奨学生としてパリへ

私が石坂財団の奨学生として、パリで暮らしたのは一九八九年の夏からの二年間、ヨーロッパが大きな変化に見舞われた時期であった。しかし当初の私は不遜にも「もうちょっと割のいい奨学金に当たってほしいなあ」などと考えていた。しかしこれほとんどでもない勘違いであった。

リップサービスでもなんでもなく、石坂財団の奨学金制度は留学生にとってかなり理想的な制度である。なぜなら、通貨レートは簡単に变化するから、日本円の奨学生はいつもこのことが気がかりである。しかし、一定した現地の通貨をもらえる石坂の奨学金は、この不安とは無縁である。奨学金によっては、関係者を現地で接待する義

務や、すべての領収書を要求するものもある。滞在国の奨学金では、奨学生が国外に出られないこともある。石坂の奨学生はこうした縛りが一切なく、現地で自由に過ごすことができるのである。

### ▼変わりゆくヨーロッパと戦争を見ながら

石坂の自由は私に、滞在先のフランスだけでなく、世界中からパリに集まっている留学生たちの故国について考える機会を確実に拡大してくれた。私が滞在していた国際学生都市にはあらゆる国の学生が住んでいた。ここには第一次大戦後に、世界平和を願って建てられた広大な学生寮群が存在し、敷地内に食堂や銀行、郵便局、劇場、プールや体育館などもあり、学生はごく安

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三十一カ国の大学・大学院へ一七九名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国五一六名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。



フランス、ナンシー地方のリュネヴィル城博物館にて(留学中)

い料金でこれらの施設を利用できる。世界平和という当初の目的は第二次大戦の勃発によって裏切られたが、それでもこの町の理念は今も生きている。

私たち寮生はこの学生都市で、ともに世界の変動を体験した。ベルリンの壁が落ちてゆくテレビ画面を食い入るように見つめていたドイツ人学生。湾岸戦争の時に「国に帰る」と叫んだ米国人学生。そしてこの時期のアラブ系の学生の屈辱的な立場——一緒に町を歩いていても、その学生だけが